全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第4章「東電の敗北」

# 海水注水 抑止に困惑 [1]

福島第1原発事故は1号機に続き、3号機でも水素爆発の恐れが高まっていた。再び起こる爆発への恐怖、上昇する放射線量―。中央制御室で、消防車による注水現場で、そして免震重要棟で必死の対応が続く。だがあらがう人間をあざ笑うかのように2号機も危機的状況に陥る。じわじわと広がる絶望感。電力業界の雄、東京電力に「敗北」の瞬間が迫っていた。

×　　×

3月13日午前6時ごろ、消防車による原子炉注水を担う東京電力自衛消防隊の副隊長新井知行(42)は、福島第1原発免震重要棟で次の任務に備えて待機していた。原発近くの双葉町の社宅で暮らす妻と、もうすぐ小学校に上がる長男のことが脳裏に浮かんだ。

## 振り回される現場

福島第1原発3号機前の逆洗弁ピット(丸印)と防火水槽(矢印)=2011年3月(東京電力提供)

自分が生きて帰れなかったら2人はどうやって生きていくのか…。

「5、6号機側にあった消防車が使えるようです」。新井は隊員からの連絡でわれに返った。

構内の高台にあって津波を免れた消防車1台と陸上自衛隊の消防車2台は既に1号機への注水に使っていた。さらに消防車があれば3号機にも注水が可能となる。

水源は3号機海側の逆洗弁ピットと呼ばれる立て坑にたまった海水を使うことにした。海水注入のラインアップが整ったころ、所長の吉田昌郎(56)が免震棟の対策本部で消防隊メンバーに言った。

「とりあえず真水でやってくれないか」

「防火水槽の水はあまりないですよ」

「真水がなくなった後、海水に切り替えるのにどれくらいかかる」

「15分ぐらいです」

「じゃあ、まずは真水だ」

免震棟から連絡を受けた現場の新井は意味が分からなかった。目の前の逆洗弁ピットには、津波によって海水がなみなみと入っているのだ。

「ここにこんなに海水があるのに」

実は吉田は、首相官邸に詰める原子力品質・安全部長川俣晋(54)から電話を受けていた。テレビ会議映像には「官邸から『海水を使う判断が早すぎる。廃炉につながる。極力、真水を使うことを考えてくれ』とコメントが来ました」という吉田の発言が残っている。

新井たちは柏崎刈羽原発(新潟県)から到着した1台と合わせ、3号機原子炉建屋の山側防火水槽から2台の消防車で注水することにした。

ただ3号機ではこの日早朝、原子炉建屋から湯気のようなものが立ち上っているのが目撃されていた。ホースを敷いている間に建屋が爆発しないだろうか―。

「建屋脇を通る時は祈るような気持ちでした」

午前9時8分、3号機中央制御室で復旧班が車のバッテリーを使って、原子炉圧力を下げる逃がし安全弁(SR弁)を開けることに成功。25分には炉圧が下がり3号機への注水が始まった。

だが、防火水槽の水はあっという間に尽きてしまった。結局、午後1時すぎになって当初の予定通り逆洗弁ピットの海水を使うことになった。

「まったく何考えてんだ」。全面マスク越しに隊員たちが言った。現場は、遠く離れた場所にいる人間の意向で振り回されていた。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 前田有貴子)